



TITLE:

アダム・スミスの書簡一通

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. アダム・スミスの書簡一通. 経済論叢 1923, 17(6): 884-885

ISSUE DATE:

1923-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128097>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第 卷七十第

行發日一月二十年二十正大

論叢

土地課稅新案 法學博士 神戸 正雄

價値の量 法學士 恒藤 恭

世界經濟の意義 法學士 作田 莊一

鎌倉時代の土地制度 文學博士 三浦 周行

時論

農民土地愛着心冷却の傾向 法學博士 河田 嗣郎

震災と租稅 法學博士 小川郷太郎

說苑

マルサスの地代論に就て 經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

アダム・スミスの書簡一通 法學博士 河上 肇

「資本と勞働」と「勞働と資本」 法學士 山口正太郎

リカアド經濟論文集の刊行 經濟學士 谷口 吉彦

名士の死の心理に関する統計的研究 經濟學士 岡崎 文規

附錄

本誌第十七卷總目錄

雜 錄

アダム・スミスの
書簡一通

河 上 肇

近着の *Economic Journal* (Vol. XXXIII, No. 131, September, 1923) に 'An unpublished letter of Adam Smith as to' 一通の書簡を載す。之はグラスゴウ大學圖書館の所藏に係るもので、今年彼地で催されたアダム・スミスの記念展覽會に出陳されたものだといふ。今次に其の主なる部分を譯出する。

× × × × ×
ロンドン、ストランド街

書肆 トマス・キャデル殿

拜啓、あなたが私の久しき御無沙汰を不思議に思はれるのは、甚だ御尤である。私の健康の弱

つた状態並びに税關への出勤は、私がスコットランドに歸つてから少からず私の時間を取つたので、私は是等の事情が許す限り研究に専心したにも拘らず、それは甚だ多くもなく、また間斷なく行はれた譯でもなく、従て私の進みは甚だ大きくなかつた。私は今私の同僚から四箇月の暇を貰ひ、現在では最も熱心に勉強に従事してゐる。私の題目は『道德情操論』であつて、私は其の總ての部分に多くの増補および訂正を爲しつつある。主な且つ最も肝要な増補は、『義務感』に關する第三篇と、『道德哲學の歴史』に關する最後の篇とである。私は私が此の世に生を保つことの極めて覺えないことを考へて居り、また私が計畫したところの、さうして其れについては私が既に多少の進みを爲してゐるところの、種々なる他の著作を完成するまで、私が生きてゐるか何うかと云ふことについて、甚だ不確であるから、所詮私の成し得る最善の事は、私の既に公にしたものを、最善の且つ最も完き状態において、之を私の死後に遺すと云ふことで

あると考へる。私は仕事の遅い、非常に仕事の遅い人間で、私の書く一切のものは、私がまづ之なら可からうと思ふに至るまで、少くとも六回は、書いたり消したりする。だから今私は私の著作をば略ぼ仕上げた積りではあるけれども、しかし其れを君の所へお送りするやうになるのは、多分六月の月になるだらうと思つてゐる。(中略)

ストラハンに宜しくお傳へを乞ふ。敬具。

一七八八年三月十五日エディンバラ

アダム・スミス

右の書簡は、その目附から見ると、スミスの永眠(一七九〇年七月十七日)に先だつこと、約一年四箇月前に認められたものである。彼は一七八七年の本にグラスゴウ大學の總長に推薦され、一七八九年の十一月まで其の地位にゐた。前記の書簡に『私の同僚から四箇月の暇を貰ひ』云々であるのは、多分グラスゴウ大學に關係したことであらう。彼は同大學の總長に推薦され

た翌年(一七八八年)の春には、一時甚しく衰へてゐた健康を頗る恢復し、餘り心配もあるまいと云ふ位になつてゐた、と傳へられてゐるが、この書簡は丁度その頃に認められたものである。なほ此の書簡に述べてある『道德情操論』は、その翌年(一七九〇年)即ち彼れの永眠の年に第六版として公にされたもので、それは前版に比し著しく増補訂正が施されて居り、且つ其の標題も The Theory of Moral Sentiments, or an Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character first of their Neighbours and afterwards of themselves. To which is added A Dissertation on the Origin of Languages と改められたものである。書簡の最後に傳言を頼んであるストラハンは、この書簡の宛てられたキヤダルと共に、『道德情操論』のロンドンにおける版元である。